

綱島梁川の周辺

——その生地及び家系をめぐって——

はじめに

本稿は、いわゆる研究論文と称すべきものではない。その基礎的段階である梁川周辺の調査に関する一報告である。それも、傍題に記す範囲の、判明した限りの事項にとどまり、望まれるところとははるかに遠い。したがって、この貧しい調査の断片から、直接何らかの梁川論を導き出す意図はここにはなく、述べんとするところは、雑駁ながらも一貫して事実の報告に尽きる。

それというのも、梁川のように近代の思想史・文学史と密接なかわりを持ちながら、いわば『忘れられた思想家』(梁川に個人的な関心を抱く近代思想や文学の研究者は意外に多いが)として、その跡をたずねる人も少ない存在は、放置する程その伝記的資料の詳細も埋没消滅する恐れが少なからぬためである。

梁川の関係資料で、みるべきものはなんといっても御遺族綱島竊氏(梁川の弟政治、号静観令息)邸にあり、御尊父の遺志通りたんねんに保存されているが、それらの整理はなお時日を要

川合道雄

し、ほとんどが故人となった関係者とのつながり一つたどるにも、すでに容易ならぬ難事と思われる。直接梁川 of 思想的人格的感化に浴した人々では、斎藤勇博士の御健在を喜ぶのみで、安倍能成氏はすでに亡く、いわゆる梁川会員のその後についても、茫漠として手がかりを得ぬものが多い。遅きに失した憾みである。幸い梁川の生地(岡山県有漢町)には、この郷土の先覚に私淑すること多年、梁川顕彰会を起すなど、地元での顕彰事業に最も尽力された葛野定一氏(同町前教育長)が御健在であるが、すでに第一線を退かれ、氏の梁川に対する理解と傾倒ぶりに見合うべき後継者を早急に求め難いのも無理からぬことである。氏の積年にわたる調査のメモも、活字に付されたものは一斑にすぎぬ。散逸のおそれはないにせよ、埋没されていてよいはずはない。例えば、全般的な旧戸籍簿の回収(被差別部落の問題とからみ、残置させぬ方針で、一括高梁の家裁へ送付された)等により、今は困難な戸籍上の調査等も、氏の御教示に負うところが一、二にとどまらなかったのである。以下、あえて粗漏の報告をも願ひ

ぬゆえんであるが、いずれにせよ、先ずは補遺的な報告の域を出ぬものであり、その点諒恕されたいと思う。

*

最初に、生地有漢について郷土史⁽²⁾の記述をたどっておくと、承久三年相模国三浦氏の一族秋庭三郎重信が戦功によりこの地——備中国有漢郷を領し、後、仁治元年高梁の松山に城を築いて城主となった。以来有漢はほとんどその領地となって支配を受けたのであるが、それより三百余年を経た延亨元年松山藩主石川主殿頭総慶が伊勢亀山に移封され、中津井に陣屋(代官)を置いて明治二年まで続いた。有漢には支部を置いたが、石川氏に代り板倉氏が松山に在城して以来一二六年で明治維新を迎えたのである。以後、明治四年の廃藩置県で深津県に属したが、翌五年小田県に変更、同八年に至る間は当時の六ヶ村に各戸長を置き、戸長宅が役場であった。ついで明治八年十二月の地租改正で六ヶ村中の垣、川関、長代三村を合して上有漢村、上・中・下村(梁川の生地市場は上村)を合して有漢村となり、同時に岡山県に編入された。更に明治十一年の郡区町村編制法により、一村一名の戸長を置いたが、二十二年町村制の制定で戸長は廃され村長を置き、村役場と称された。その後、上有漢村と有漢村が合併、現在の有漢町となったのは昭和三十一年四月のことである。

ついで有漢の現状にふれねばならないが、それにはひと先ず梁川及び彼の詞碑にふれた大河内昭爾氏の簡潔な一文を引用しておこう。

倉敷から総社高梁市、新見市へ通じるのが伯備線である。高梁市も京都に擬せられる古風なたたずまいを持った町だ。高梁川にちなんで梁川と号した綱島栄一郎は、当時の上房郡有漢村、現在高梁市市場に明治六年に生まれている。……有漢高校にふるさとを見おろして立つ綱島梁川詞碑は安倍能成の撰文である。

「爾の現在を充たせ 現在は爾が全宇宙也否爾自身也 真に働くものは最も切実に現在に立ち現在を充たさん事を希ふ 彼れは当面の一事一会に全魂魄を打込んで復た其の他を顧みざる也 綱島梁川」

なお、右に続く碑陰の文章は略記されているので、後全文を掲げるとして、とにかく岡山・高梁間が急行で一時間足らず、高梁から有漢までがバスで約三十分、決して遠い距離ではない。岡山から車なら、吉備路の風物をめでつつ総社へ出、次第に山間へと高梁川の広い清冽な流れに沿ってさかのぼると、まもなく高梁市に入る。そこから更に山奥へほぼ二十分、支流有漢川の溪流沿いに分け入ると、やがて上房郡有漢町(当時の有漢村)に着く。今も随分ひなびた土地がらであるが、その満目田畑を見はるかす高台に有漢高校(正確には岡山県立高梁高校有漢分校)の小ぢんまりとした校舎がそびえ、この門内入り口近い一角に梁川詞碑は建っている。樹木に囲まれた碑石の高さは、台座を除いて二メートル五十センチ。碑陰に刻まれた安倍能成の文章は、『近代文学研究叢書』第九卷(昭和女子大)ですでに紹介されているが、再掲すると左の通りである。

綱島梁川先生名は栄一郎長四郎の嫡男母クメ明治六年五月廿六日当村市場に生る十九年郷学知新校を卒へ続いてここに教鞭を執る廿五年志を立てて東京専門学校に入り廿八年文科卒業坪内逍遙大西祝の庇護感化に浴す其の後数年広く文芸美術教育倫理の諸問題を縦論して稲門秀才の名一時に高かりしが興味を中心自ら倫理學に集り業績最此領域に多く内容亦時代の水準を抜く廿九年春俄に咯血卅三年以降約八年終生殆病床を離れず先生在郷の日既に基督信者たりしが発病以來漸く上京後の懷疑を脱して其道徳的要求は必然宗教的信仰を打開し来り天地の神を恋ふる心転々切なるあり晩五六年に至る這間消息の発表は日露役前後の思想界に漲りし求道の精神を動し方丈の病室即ち無声の教壇たり卅七年見神を實驗して翌年之を告白するや是非轟々たりされど此の體驗はよく先生の信仰を置礎し神は之によつて具體的現在となり神子の自覚は正に神と偕に楽しみ神と偕に働くの境を實感せしめ又仏耶の別に拘せざるに至れり四十年九月十四日此法悦裏に帰寂享年三十五維司谷に葬る先生純真穎悟好學好問反省に敏感に饒年少父を失つて一家を負ひ老母に孝弟妹に友其溫容に接する者敬愛せざるなし著書病間録回光錄最世に行はる全集十卷既刊未刊感想日誌手簡の一切を網羅す碑面筆蹟は即ち第五卷所載勞働と人生の原稿に採れり

昭和十八年十一月

安倍能成撰並書

まさに太平洋戦争たけなわの時期に草されているだけ、言外切

々の響きを持つ……。しかし、何分觀光路を離れた山間の地で、どれ程世人の注目を引き得るかは疑わしいが、さすが詞碑を抱く有漢高校では、四十七年秋に「梁川生誕百年記念展」を、その前年には彼を偲ぶ講演会を開催、また同校生徒会誌「高嶺」（17・18号）には、ささやかながら梁川特集が編まれるなど、この郷土の先覚は決して忘れられてはいない。現代の高校生が、ある意味では難解な梁川の思想をはたしてどれ程理解できるかは別として、やはりこのことは無視されてはなるまい。彼が、現在（同時に未来）に対して、今も語りかけている事実の重味は否定し難いからである。

だが、ここで暫く詞碑をめぐる建碑の由来その他は後にゆずり、先ず梁川の家族、綱島家の家系等について、一応の報告を述べておきたい。これらについては手近なもので、さきの『近代文学研究叢書』9（昭三三・九、昭和女子大）収録の綱島梁川「生涯」及び「遺族、面影、遺跡」に最も精緻、適切な記述があるが、右では長姉で、いの生没年が不明であるほか、それら遺族の現況に及ぶ詳細は述べられていない。また、梁川庵の現状も同書の採訪時点とはすでに異なっているので、それらを一括補足することから始めたいと思う。

*

先ず、いについて。戸籍簿（高梁市巨瀬町役場、他は有漢町役場）によると、彼女は明治元年二月十八日生まれ。長じて巨瀬村（現在高梁市巨瀬町）塩坪四、八三七番の二、石井末三郎（安政

六・一〇・八生まれ）に嫁し、長女良、長男研一（五歳で死亡）の二児を生んだ。末三郎は明治二十九年巨瀬村長をつとめたが、その後妻と共に上京。戸籍面では明治四十五年三月十二日付、巨瀬村より東京市牛込区余丁町九四番地への転籍届が出ているが、出京して同処に居住したのは梁川の生前であり、夫妻ともどもその看病にあたっている。ていが他界したのは、明治四十四年六月二十一日午前九時五十分である。後、末三郎は岡山に居住、墓も同地にあるといわれる。長女良は昭和初年まで存命したが、彼女が婿に迎えた菊三郎が石井家をついだ。同氏は参謀本部に勤務、都内杉並の網島家近くに居住していたが、終戦直後他界した。

それともう一人、栄一郎（梁川）には養姉にあたるヨネがいた。彼女は安政五年一月十一日生まれで、広島県三次郡原村、浜岡甚平の妹だが、これは長四郎に実子ができたので、復籍して広島へ帰っている。

で、梁川のきょうだいは長姉で、いと次姉^{せん}、それに弟政治（静観）と、ふぢ及びすへの二妹がいたわけだが、うちせんは明治二十一年二月十二日、すへは同二十五年三月十二日（『近代文学研究叢書』は二月としているが、網島家の位牌による）にいずれも早世。また、父長四郎は明治十九年十二月一日すでに他界しているのので、梁川が上京後の三十年十月故郷から招き、ささやかながら水入らずの生活を持った最初のメンバーは、母くめと弟政治、妹ふぢの三名である。以下、彼等について述べておこう。

くめは、嘉永元年九月十五日、阿哲郡新見村（現新見市）に土族横田喜三次の二女として生まれた。この新見郷は、元和名鈔鈔

多郡新見郷の莊園他南北七里にわたる大莊園で、元弘三年新見九郎貞直が国人として居住数代続いたが、天文の頃三村家親の影響を受け、その子元親が松山城主となつてからは三村氏に従属した。新見藩主は関氏であるが、これは初代津山藩主森忠政（森可成の三男で同長定（蘭丸）の弟）の女関成次が結婚、その子長政が関氏をついで新見藩主となったもので、以後長治、長広……と徳川時代は一万八万石。小藩ながら明治維新まで関公様として続き、今も土下座祭りと称する春祭りがある。鷹の巣城と称された居城はすでにないが、くめの父横田喜三次はこの関公の藩士である。しかし、梁川が深く敬愛していた母くめは、格別の才女や女丈夫ではなく、「普通のコンモンセンスを具へ、而して涙多く、心優しく、一個循々たる良妻善母たること惟だ之のみ矣。」という如き人柄であった。幸い長寿を得て昭和十一年三月十八日、行年八十九歳で世を去った。

ついで弟政治（旧姓建部・号静観）。この兄思いの弟（夫妻）については特筆しておかねばならないが、今は戸籍上の系譜を記すのみにとどめたい。政治は明治九年四月二十一日生まれ。昭和三十八年十二月二十日、数え八十八歳の高齢で没した。もと建部家（養父建部若松）の養子になったが、長男栄一郎の死によって網島家に復籍した。ただし、この時養家から籍をぬくのに、母のくめはひとかたならぬ苦勞をしたものという。

ともあれ梁川が家族を呼びよせたのはある程度生活の目安もついていたからであるが、やがて政治は希望通りに東京美術学校（芸大）に入学させた。ここで彼は日本画の橋本雅芳に師事し、後には静

観と号して文展の大家となるが、当時は美校への通学も徒歩で、余丁町から飯田橋、水道橋、本郷と経て、ようやく上野へ出たものという。ただ、この間の詳細は、現在の綱島家（嗣子竊氏邸）にも日記その他の資料が見あたらず確認し難いが、ふぢが、美校で同期の画家筆谷等観（儀三郎）の夫人であり、その長女絢子氏（故大久保寛氏夫人）及び竊氏等御遺族の記憶をたどると、明治三十四年の卒業かと思われ、暫時して牛込若松町にあった成城中学に絵画の専任教師として就任（等観は週二回程度の時間講師として同校に勤務、主として中国人留学生に教授した）。ほぼ十年余在職して大正期を迎え、一応画業で生計が立ち得る見通しを得て退職し、以後は自宅で製作に専念した。

夫人松女との結婚は、入籍届によると明治三十七年十二月八日。政治二十八歳、松二十歳の時。むろん建部姓での結婚であったのだが、綱島姓へ復帰の養子縁組離縁届は明治四十一年五月四日付となっている。松は梁川が没する三年前に嫁してきたわけだが、文字通り寝食を共にして看病にあたった。没年は昭和四十二年九月十六日である。

静観、松の間に四子があったが、明治四十四年一月十日生まれの長男皓は、大正五年七月三十一日、当年わずか六歳で病没、三男弘成は昭和十九年戦病死されたことから、現在綱島家の御遺族は長女小夜子氏（間野延太郎氏夫人）と次男竊氏（嗣子、北里大教授・英文学）の二氏である。

なおふぢについては今もふれたが、明治十二年三月二日生まれ。昭和三十九年六月没。明治三十六年九月二日、北海道小樽区

信香裡町十七、筆谷儀三郎（等観）と結婚。同氏との間に長女絢子（大久保姓）、長男桂一郎（嗣子）、次女露子（枝吉姓）の三名があり、いずれも御健在である。そして、以上の母くめ及び弟政治（静観）、松夫妻を中心に、

姉婿石井末三郎氏、妹婿筆谷儀三郎氏。何れも近隣に住はれて、是又一通りならぬ世話をせられた。どんな危急な時でも、手が足りないといふ事はなかつた。

というように、結婚後のいふぢも、夫ともども梁川の看病に尽力したのである。むろん、彼等のほかにも梁川を敬慕し、その健康を気づかう多くの人々はいた。しかし、日夜起居を共にしたこれら家族の献身的な愛情によって、はじめて彼の病床生活は支えられたといっても過言ではあるまい。これも、梁川に深く師事した宇在美不喚楼（英太郎）の回顧だが、

母堂は殆んど先生の看病の爲めに、この世に残つて居られるかと思はるゝ程である。夜半と雖も二時間とは続けて睡眠の出来ぬ先生に侍して、十年間一日の如く、介抱してゐられる。その所以で母堂はきれぐれに眠る事が永い習慣になつてゐられるといふ事である。それであるから母堂には随分人にいへぬ事もいふ。稀にはおかし味を混へた我儘もいふ。体を拭いて貰ふのに、母堂が「しんどからうにな」といはれた時に「お母さんそれはいけない。しんどからうといふからしんどらなる。かうすると楽になる／＼というて、拭いて下さらんとはいかん」といはれた事もあつたと、母堂のお咄であつた。

といい、また

令弟建部政治氏（成城学校教師）との親しみは、余所の見る眼も羨しい程で、十才以後今日迄一度も口論した事はないといふにも分る。先生の看護は多年経験してゐられたからでもあらうが、一種感通する処あるものゝ如く見ゆる。……其細君又稀に見る篤実な人で、相俟つて痒い処へ手の届くやうな介抱であつた。看護に就て苟も不平らしい顔をされたのを見た事もなく、厭ふ顔をみられたのを見た事もない。いつも怡悦の面容裕かに蒲団に凭つてゐる先生、その前に真摯なる態度で病人に気を配つてゐる建部氏、余はいつでも明かに思ひ浮べる事が出来る。

と述べている。だが、同時にそれは、

苦しい病床生活中、周囲の者に一度も不快な思いをさせようなことはありませんでした。……義妹の私にもよくして下さいまして何と御礼を申し上げてよいかわからない位やさしいお方でした。（松夫人談）

といった彼自身の人柄に負うところも大きかったに違いない。

*

次に、梁川終焉の地——新宿区大久保余丁町四十八番地にあった彼の病棟は、『近代文学研究叢書』9の伝えるように、「大正十三年三月梁川会の人々によって買いとられ、大正十三年秋（十一月）都内杉並区東田町の綱島静観氏邸内に移転された」のであり、「その後静観氏夫妻の隠居宅として一部を改造」された。ただし、

「昔のおもかげをとどめて現在に至っている。」とあるのは同書採訪時点（昭和三十二年四月十日）のそれで、当初から安普請の借家であつたことから移転後の老朽化はかなりひどく、昭和三十八年末静観氏が他界、同四十二年秋、松夫人がなくなつた翌四十三年には使用に堪えぬものとなつて取りこわされ、現在は母屋に続く奥手の二間——洋間と令息窃氏の書庫に改築されている。従つて、梁川庵の外形はすでにないが、窃氏の意向で、書庫内の一隅に当時梁川が使用していた書棚が原形のまゝはめこまれ、所蔵本の一部及び関係文献若干が保存されている（梁川の蔵書中、漢籍類のほとんどは安倍能成氏の希望で、氏の手元に引きとられた）。

以下、右の模様をやや詳細に伝えると、先ず玄關脇の一室に、静観画伯の大作と共に、梁川の直筆「神と偕にたのしみ神と偕にはたらく」の扁額、同じく書庫手前の洋室に「法悦者不断見神也」の二面が掲げられ、この書庫内、入口から正面の奥に小さな仏壇が設けられ、ここに綱島家一族の位牌が安置されている。

内部最奥の正面に据えられているのが梁川の写真だが、円形の木板表面に金泥をぬり、その上に焼きつけた靈位用のもので、台座と共に裏面は黒の漆塗り。そこにくすんだ金文字で綱島栄一郎、明治四十年九月十四日と記されている。その向かつて右にも同形の写真台があり、五、六歳のかわいらしい幼児が写っている。梁川の甥綱島皓——大正五年七月三十一日、疫痢で幼い生命を奪われた静観の長男（窃氏の令兄）である。左端の位牌は翰林院神童女幽、裏面に明治二十五年三月十二日、俗名スへとあつて早世

した梁川の妹、つまり長四郎の四女のもの。さらに前列三基の位牌は、向かって右から綱島弘成位。昭和十九年に戦病死された静観末男（窃氏令弟）のもので、ついで中央にこれも俗名のまま綱島静観・綱島松位。左に仁照院義道実勇居士、同じく慈恭院義徳妙勇大姉（裏面に宅字横田）と並記されているのは長四郎とくめのそれである。

本来綱島家は、禅宗（曹洞宗）の壇家であつたが、静解氏は梁川の影響もあつてか、特定の宗義にとらわれず、その意味では一種の無宗教に近かつたようである。特に戒名が用いられていないところは、そういう氏の意向によるものと思われる。ほかに、主治医前田秀邨の筆になる揭示板二枚が保存されている。これは、

大久保余丁町に故梁川先生の静居を叩いた者は、其玄関の表に「梁川先生治療中御来客の面談は午後三時より四時限りと相極候」といふ制札と、又先生の病室に「吸煙長談有害主客」といふ揭示とが高雅飄逸な筆で書いてあつたのを見たであらう。

と述べられているものだが、正確には「面談は晴暖の日午後三時より四時限と相極候事」とあり、行を改めた末尾に主治医前田秀邨と記されている。居室のそれは方形の板面に署名共三行、「綱島先生の静居、吸煙長談有害主客」としたためたあと、署名は「荀斎前田生」とふるっている。秀邨は梁川の病氣初発以来十数年、一貫して治療の任に当たった人で、青年時代の梁川が神戸の吉田病院に転養できたのも、逍遙夫妻の意を受けた秀邨の厚意であり、後、小田原に静養できたのも、同様この人の配慮によつた。

両者の間がほとんど骨肉の如き親しさであつたのも、もっともであらう。ただし、

刺を通ずる者非常に多く、殊に地方から文書の往復位では嫌らないで、態々面会に出て来る人がなか／＼多い。……先生は……求道者に接する事を以て、己が使命と信じ、病苦を忍んで、眼めて逢はれた。

という状態で、主客共に厳守したとはいひ難かつた。

なお、書架には名著『春秋倫理思想史』（明四〇・一二、早大出版部）等も収められているが、今は古書店に『梁川全集』十巻の揃いを見出だすのも容易ではない。同全集が完結したのは大正十二年四月だが、予約配本直後に起こつた関東大震災で紙型が全焼、再版不能の状態となつたことも一因である。

*

さて、このへんでもう一度生地有漢にもどり、ここでの顕彰事業の経緯、及び関連する二、三にふれておきたいが、先ず昭和三十三年六月十九日付「山陽新聞」は、「綱島梁川の顕彰会再発足へ」と題して、左のような報告を掲げている。

梁川を最も崇拜し敬慕している学習院長、安倍能成氏が、梁川の命日にあたる九月十四日、生地の有漢町をたずねることにこの程本決まりとなつた。これを契機として有漢町は一時中断していた梁川顕彰会の再発足をはかるとともに、梁川文庫設置など梁川にちなむ企画を進めている……一方、高梁市中町、東照平医師（七三）は……知らせをきき、三十年間

同氏が所蔵して来た梁川の手紙を会に移し、梁川文庫に納めたいと申出……人々を感激させている。この手紙は梁川が東京専門学校に在学当時に、坪内逍遙の家に寄寓していた明治二十七年、郷土の先輩、神崎秀甫、莊三郎吉、笹田金治郎の三氏にあてたもので……内容は郷里の選挙、坪内逍遙のことなど……。神崎秀甫氏の長男であった良甫氏が昭和初期病死した時、東氏に所蔵を托したものである……。

更に当日の模様（九・一六付）は、

この日……安倍能成氏が橋本竜伍代議士らと午前十一時ごろ岡山市から来町、ただちに同町有漢高校校庭にある梁川碑（昭和十八年建立）を見学した。……裏面は安倍院長の筆跡となつてゐるが、同院長がこの碑を見るのは今回がはじめてで懐しそうに見入つてゐた。このあと……小憩のち午後一時から大月町長らの案内で梁川の生家跡（現在町役場になつてゐる）などを視察、午後二時から同町公民館で行われた記念講演会に臨んだ。梁川の遺墨や弟にあたる綱島静観氏の絵が飾られた会場には地元有漢町や高梁市から集まつた約五百人が……同院長の約一時間三十分にあたる梁川にかんする講演に耳を傾けていた。……講演終了後ただちに……役員などを選んで結成会を終つた。

とある。ちょうどこの年、梁川没後五十年祭を迎えたためなのだが、この記念行事の開催に、地元で最も尽力されたのは前述した葛野定一氏であり、氏から、健康上出席できなかった綱島静観氏（代理参氏）に宛てた昭和三十二年九月二十五日付書簡は、そ

の模様を詳細に伝えている。ただ、ここで逐一紹介する余裕はないまま「梁川顕彰会」、及び文中「誕生記念碑は裏の新居で一度写してから役場の表へ出して建てました。」「梁川先生遺髪は確かに預りましたから後又相談の上取図らいます。」と述べられてゐる二点についてのみ簡単に補足しておく、顕彰会の発足は昭和十八年、この日の再発足では特別会員約五十名、正会員約百名となつてゐる。ついで誕生記念碑は同町市場バス停傍、役場玄関前にあり、表に「綱島梁川先生誕生之地」、裏面に「昭和三十三年八月吉辰 綱島梁川顕彰会建之 驚塚泰石謹書 寄贈岩原潔氏」と刻まれている（驚塚氏は地元の書家で本名清。岩原氏は高校記念碑をも建てた人）。有漢川を背にしたこの役場の裏手（市場、新屋二、一六一番の第一地）に生家があつたわけで、松の太木が塀を越えてのび、川向うにも同様松の巨木があつて、梁川はそれを眺めつつ勉強したというが、今はない。道路改正前は、この碑も川に面して建ててゐた。その川向うに綱島家代々の墓域があり、梁川の遺髪はここに納められた。石碑の高さ約二メートル、「綱島梁川先生遺髪之塚」と刻まれた裏面に「昭和三十四年九月十四日、綱島梁川顕彰会建之」とあり、揮毫者彫刻者として同じく驚塚岩原両氏の姓名が記されている。

つまり、有漢に建つ三つの梁川碑は、いずれも顕彰会の手によつて成つたものだが、さきの紙上、高校詞碑について「昭和十八年建立」と記されてゐるのは誤りで、右は郷土史の記述の如く、「昭和二十年当時……有漢町内は勿論、高梁・倉敷・岡山の知名の士や遠く東京市内の梁川関係者や後輩の人々の寄付によつ

て」完成したのであり、特にこの中、在京関係者の活動については、山室武甫氏（軍平氏令息）が左のように回想している。

昭和十六年の頃亡父軍平の郷里に近い綱島梁川の生地……を訪うた。其折有志から建碑の希望を告げられ、且其世話を依頼された。戦争中であつたが、多数の新聞雑誌に寄稿して世の注意を喚起し、又関係者に訴えた。東京の弓町本郷教会で、一高校長安倍能成、斎藤勇文博、パスカル研究家由木康の三氏による記念講演会を催した。梁川の令弟綱島静観画伯の手許にある遺稿「労働と人生」中の一句を選び之を……信木三三郎氏の好意によつて写真で拡大し、記念碑の表面に刻む事とした。……石工が徴用され、工事は遷延したが、昭和二十年終戦前後に……竣工した。地元では素封家尾島儀一郎が中心となつて地方民に訴え、東都では筆者が中心となつて微力を捧げた云々。

ところで、東昭平医師が寄贈したという梁川書簡だが、本文は『梁川全集』第九巻（書簡）の第一ページ、明治二十七年の項に収録されているので右にゆずり、宛名の神崎秀甫以下三名（莊三郎吉、笹田金治郎は、ともに庄三郎吉、笹田金次の誤記）との関係のみふれておきたい。中でも秀甫は、梁川のキリスト教入信に直接影響を与えた人物として注目を要するが、幸い御遺族として、有漢には次男勤氏が八十六歳の御高齢ながら医院を開業されており、また、都下三鷹市には三男三益氏が在住され、現在武蔵野赤十字病院長兼日本病院協会長として活躍されている。先ず秀甫の生い立ち等、知り得た多少から述べておこう。

神崎秀甫は安政三年生まれ。大正十二年八月、六十七歳で没した。神崎家は有漢の東南、山一つ越した竹之荘（現在上房郡賀陽町）で代々漢方の医家であつた。母のつるは同家のひとり娘であつたが、美濃之正の神主小川家へ嫁ぎ、秀甫を生んだ。ところが秀甫四、五歳の年に婚家が絶え、神崎家も血縁はつるのみであつたことから、本来は小川家を継ぐべき身だが、秀甫をつれて実家に復籍した。従つてつるはひとり息子に医家神崎家を継がせる必要上、秀甫十二歳頃、城下町高梁で板倉藩御殿医をつとめを柳井家に弟子入りさせた（御子孫柳井恒夫氏確認）。しかし、同家はその後上京することになり、柳井は未だ修業中であつた秀甫を同じく医家である赤木蘇平の許へ託していった。この蘇平が熱心なクリスチャンであつたことから、その感化を受けて秀甫はキリスト教に入信したのである。蘇平が死んだ時、貧民街の住人一同は、せめてもの恩返しに、棺なりとかつがせてほしいと懇願したという。秀甫の入信は、教義ではなく、そうした蘇平の人格に傾倒したためであつた。秀甫十五、六歳の頃である。

だが、当時はバテレンの禁を解かれた直後で、さまざまな迫害や嫌がらせがあつた。集会中、法華の太鼓で邪魔されたり、河原の小石が投げこまれたのみならず、つるからは、代々の医家で神官の血も受けながら、耶穌教を信じるとはと、位牌で頭や肩をたたかれたのが何よりつらかつた。母子家庭で母の言いつけは絶対的なものだったが、信仰だけは守りぬいたわけである。秀甫が有漢へ移住したのは明治十年頃。開業したのは二十歳という若さだったので、母のつるはたるべく老けてみえる衣装を着せたものと

いう。やがて、宛名の後者二名が入信した。で、その頃有漢でキリスト教の入信者はこの神崎秀甫と庄三郎吉、笹田金次の三名となったが、秀甫は代々の医家であり、三郎吉は姓の如き家柄で、土塀をめぐらした広大な邸宅に住み、笹田は呉服、雜貨を扱って屈指の金持と、いずれも村内の名家であったから、村民もこの三名には手が出せない。相よって有漢でキリスト教を守った(高梁教会会員)のだが、特に明治十七年、有漢基督教講義所の開設以来、伝道世話役として尽力した秀甫の功績は大きい。同講義所は、組合派高梁教会の所屬で現在も市場にあるが、左に郷土史の記述を摘記しておく。

明治十七年九月四日の創立で……現在の建物は、大正三年七月五日の建設にかゝるものである。本町キリスト教布教の濫觴は明治十七年九月四日の伝道を始めとする。其後高梁より常に牧師を招き、毎回数回の伝道につとめ、次第に洗礼を受けるものが増加した。明治二十一年十月十三日、子供安息学校開設、毎日曜日教授す。

ともあれ、代々漢方の神崎家は、同時に自宅が漢学塾をも兼ねていて、また綱島家のごく間近にあったので、梁川は幼少時からよく同家に入入りした。それに神崎家も前述の如く竹之庄の出身で、有漢に縁戚を全く欠いた事情から、両家はほとんど親戚同様の親しい間柄となった(これは現在両家の御遺族間でも同様)。

従つてその間、自然とキリスト教にも話が及んだわけで、年若い梁川は深くその影響を受けたのである。梁川が受洗したのは明治二十年十五歳の時、秀甫と梁川の年齢には十七歳の開きがある

が、早熟な梁川が交わりを求めたのは、常にこれら年長の先輩達であった。

以後、彼はほぼ四里(一五、六キロ)の道程を高梁教会まで通い(ここで英語をも学んだ)、或は講義所に出席するのだが、今、上京前年の明治二十四年度日記からその模様を一瞥しておく。

三月八日 この日は安息日なりければ、九時より講義所に出づ。……神崎氏の小話あり。この日高梁教会に於ては新島先生追悼会の設けあり。……庄兄独り出会せられる。さぞ盛會なりしならん。

七月五日 晴(日) 神崎・笹田・庄三兄と俱に午前八時より出梁す。輕装単衣清涼なる朝風にその面を吹かれつゝ談笑湧生の中に高梁に着したるは実に未曾有の清興なりき。……午後二時共に會堂に赴く、式の前に當り牧師の説教あり、嶄新にして興味多かりき。それより引続き晚餐式を執行し了りて……共に八時の鐘を聞きて會堂に詣でぬ。……梁川の流聲を枕にして眠り、一睡朝まで何事も知らざりき。

六日 晴……余は笹田氏と偕に帰らんとするの契約もあれば、則ち急に朝食を済し、……帰途に就きは午前五時半なりし。帰村したる九時前なりければ直ちに学校に出動せり。

なお、笹田金次は文久元年生まれ。主として松村介石に師事し、十余年間村會議員を勤めたが、梁川が没した翌四十一年三月他界。遺言により金二百円が村内貧窮民救済金として寄託された。

さて最後に、右に続く郷土の先輩知友にもふれねばならない

が、すでに余白も尽きた。主要な数名を付記するにとどめて、この稿を結びたい。

梁川は明治十一年六歳から知新校（尋常四年高等四年）に学び（同級生は中山祇重、織のわずか三名）、ここで中村長遷・脇田厚等の教えを受けたわけだが、同時にこの間、特に漢学の教授を伯父綱島潤徳から受けた。潤徳は大酒店で聞こえた漢学者であったが、古くは知新校の教職にあり、梁川の生家から有漢川一つ隔てた対岸に居住していた。……やがて梁川は、向学の志止み難く上京を決意、東京専門学校に入学するのは周知のところだが、この際、物心両面の援助を借しなかったのは綱島宏一郎、佐藤兵八、佐藤晋一の三名である。

宏一郎は綱島本家の当主で、安政六年生まれ。明治五年中村戸長、明治十一年有漢村戸長となり、後村長。綱島家は江戸初期以来代々の庄屋で、有漢、竹之荘から一万石（知行百石）に及ぶ領地をおさめたといわれるが、現在有漢羽場区の中央には石垣をめぐらした宏大な邸跡があり、その二段に分かれた広い墓地には天和二年に始まり、嘉永から明治以降に至る無数の墓石が見事に並び、その盛威の程を伺わせる。有漢に綱島家は今も多く、その関係は不詳だが、分家した一族であることは確かである。

佐藤兵八は弘化元年十一月生まれ。松山藩、進鴻溪の門に入り、常に塾頭に挙げられた程の好学の俊英。性剛毅で卓見あり、特に理財に長じた。家業の酒造を継いだ後、更に醬油醸造に手を広めて巨万の富を築いたが、同時に公共の事業や貧民救助に力を尽くし、殊に貧家の俊才に学資を投じて遊学させるのを無上の楽

しみにしたという。明治十三年県会議員、同二十七年衆議院議員となったが、結局政治で財を失ったのが因となり、晩年は悲劇に終わった。しかし、梁川の専門学校在学中、有力な経済的援助者であった。

佐藤晋一は明治二年生まれ。梁川とは年齢的な開きも少ないだけ、上京前後を通じて最も密接な関係を持ったが、明治三十六年県会議員となり、以後十数年在任した。特に教育に関心を寄せ、明治三十七年七月、有漢教員養成所を創設、県下にさきがけて教育村有漢の名を広めたが、それには梁川の影響が強く働いていたといわれる。（一九七四・九）

本稿の執筆に際し、綱島竊、神崎三益、葛野定一、津久井泰輔（有漢高校）の諸氏に多大の御協力と御援助を戴いた。ここに付記して厚く感謝の意を捧げる。

注（１） 松本皓一「忘れられた宗教思想家・綱島梁川」（『春秋』

一四七号、昭四八・八、九月合併号、春秋社）

（２） 葛野定一編『有漢郷土史』（昭四九・三改訂版、有漢町教育委員会刊）

（３） 「月刊ペン」第六巻第十号「現代文学地図・岡山県」（昭四八・一〇）

（４） 明治三十四年十月三十日、岡山県上房郡有漢村、脇田厚氏宛封書の冒頭に左のような一節がある。

此度は石井家族上京につきては色々御配慮の程奉謝候同

人へ御寄托の御書簡たしかに落手云々。

- (5) この二姉が対蹠的な性格であったことは、明治二十五年八月帰省中に書かれた次の一文に伺われる。

一は陽、一は陰、一は動、一は静、一は身体強大にして心志も活発に、一は身体弱小にして心志自ら温順なり。之を要するに長姉は父に肖て少姉は母に肖たりと云ふべき歟……。今や長姉は他家に適きて二個の児女を挙げ……小姉は……己に鳥部山一片の烟と消え失せぬ。〔長姉と幼姉〕

『梁川全集』第十卷)

- (6) 「吾母」『梁川全集』第十卷

- (7) (8) 宇佐美英太郎「綱島先生の回想」〔新人〕八巻十号、明四〇・一〇)

- (9) 『近代文学研究叢書』9 (昭和女子大・昭和三十二年四月十日採訪)

- (10) 落峰生「綱島先生の病状」〔新人〕八巻十二号、明四〇・一二)

- (11) 同前の文中、秀邨談として左のように述べられている。

初発の診察は君がまだ坪内先生の許に食客としてゐられた時で、十三、四年も以前の事でせう。冬の寒い頃で……咯血も少々ありまして……私は坪内先生との関係から診て進めたわけですが、此温厚にして有為な青年を此病に捉へしめたのは気の毒なことであると思つてゐました。……坪内先生夫妻が君に致さるゝ同情といふものは非常なものです。夫人の如きも咯血の時は自ら氷を取つて看護の手を尽

された程で、私も其義気に感じ、且つは先生の御依頼もあつたので、神戸の吉田病院長が知己なるを幸ひ、頼んでそこに君を送つたのです。……所が暫くして再発しましたので、今回は小田原に転地をすゝめ、薬は始終小包で送つてゐました。

- (12) 宇佐美英太郎「綱島先生の回想」

- (13) 『梁川全集』十巻その他遺墨等をそろえ、当初は有漢西小学校に保存されたが、有漢町コミュニティセンター(館長岡町教育長)の新設により、昭和四十九年七月以降同所に移転した。現在整理段階。

- (14) 「思想家としての梁川―その時代的背景と人間性」〔中外日報〕第一三四〇六号、昭三二・一一・一二)

- (15) 『梁川全集』第八巻

- (16) 右については、昭和四十四年七月発行の『有漢郷土史』旧版の記述を参照した。(改訂版省略)

- (追記) なお、雑司ヶ谷墓地での埋葬につき、『近代文学研究

叢書』の「遺骸は……座棺のまま土葬にされた。」とある記述は何に基づくのであろうか。不明である。前掲宇佐美英太郎の回想にも「先生の死なれた夜は……寝棺の前で通夜をした。」「葬式は十七日本郷会堂で行はれた。……寝棺を祭壇に据えて、司会者野口牧師の挨拶云々」(傍点いずれも川合)とあり、残された当日の写真(自宅から出棺時のもの、本郷教会祭壇に安置された柩)等によつても、明らかに臥棺である。